● ビブリオテーカ ●

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No.16
2020.11

いろいろな図書館と図書

国際教養学科
教授 永塚 史孝

日本図書館協会によれば，2019年の日本の公共図書館は3,303館，蔵書は453,410千冊で，図書館は利用者種別で国立，公共，大学，学校，専門，他施設設置の図書館とされている。

国立図書館には国立国会図書館がある。国立国会図書館法という法で設置され，基本的役割は国会活動の補佐，資料・情報の収集・保存，情報資源の利用提供である。国内唯一の法定納本図書館で国内全出版物等を収集保存し，資料のデジタル化もおこなっている。収集物は図書，小冊子，逐次刊行物，楽譜，地図，映画フィルム，HPなど電子的に流通する文字や映像，音などの情報も含まれる。そのため大きな図書館で，中央図書館の東京本館と附属国会分館，関西館があり，支部図書館に国際子ども図書館などを置く。2018年度同館統計の蔵書は4418万7016点，年間受入77万7千点余りに及ぶ。入館利用は満18歳以上が基本となる。国会図書館を研究で利用するが，その全貌は把握できていない。先輩研究者らから，国会図書館内で迷っているうちは未熟な研究者と言われたのを覚えている。それほど大きく，納本制度と蔵書数から研究に頼りにもなる存在である。

大学図書館は上記協会統計では2019年に1430館で蔵書は328,662千冊である。本学の日本大学図書館は全学問分野に及ぶ約550万冊以上を蔵書し，国際関係学部分館は蔵書約42万冊，電子ジャーナル・データベース約2万7千タイトルをほこる。日本で大学図書館の固有規定はないが，大学設置に関する大学設置基準は，大学が学部の種類規模等に応じて図書，学術雑誌，視聴覚資料や教育研究上必要な資料を図書館中心に系統的に備えるとしている。世界では大学図書館は中世頃から大学学寮などに設置され，その後学問体系や印刷技術などで蔵書を増やすが，多くは研究者や教員対象のコレクション・資料収集，研究中心の施設設備とされた。第2次世界大戦後は増加する学部学生支援として，学習図書館の機能が注目され，現在は社会への情報の発信や提供，電子図書館，情報メディアセンター，学習支援空間としてのラーニング・コモンズやセンターなどに変容している。ジョンズ・ホプキンス大学初代総長ダニエル・C・ギルマン（Daniel Coit Gilman.1831-1908）は「大学図書館は大学の心臓である。もし心臓が虚弱であれば他のすべての機関の機能はにぶる」（日本大學.1936『図書館記』日本大學出版部p.18.本学蔵）と述べている。

▲ 国立国会図書館

こうした話は，大学生の時に図書館学の先生から学んだ。とくに，図書，資料，文字，言語，記号，記録とは何か，資料の意義，保存，分類や検索について学んだ。現在，図書館の蔵書検索はオンライン目録（OPAC, online public access catalog）だが，当時電子検索は未普及で，紙のカード目録（card catalog）で探した。薬棚のような引出しに，書誌情報を記した縦75横125mmのカードが図書分類法によってアルファベットや五十音順に書名や著者名で並んでいる。他者の経験やアドバイスも参考にひたすら手作業で探す。自分が望む資料にたどり着けないもどかしさや，目的のカードの前後のカード情報から広がる新資料発見のうれしさもあった。また，図書分類法も古代から世界では様々なことを知ると，整然と並ぶカードがつなぐ世界に魅了された。自分で目録を作成し，どの図書館に何があるかがわかると研究をしている気分にもなった。カードは資料と人を結びつけ，そこに人の所作や蓄積がみえた。

▲ カード目録（card catalog）

現在はその結びつきがわかりにくい時もある。その結びつけを行うのが研究者や教師，司書などである。

教育学や歴史学などの先生からも学問とは何か，研究の方法などを学んだが，特に教育史では1次資料の収集，分析考察へのこだわりを学んだ。資料にはマイクロフィルム化されたものもあり，紙への印刷は時間がかかった。時に元のフィルム撮影が乱雑で，読取機械の1画面に1頁が合わず，次頁が映り込む時があった。印刷の仕上がりとしてはよくないと考え，先生に相談すると，それでよいと言う。次頁が映り込んでいた方が，頁抜けがない確実な資料で安心して研究できるということであった。なるほどと納得し，研究の基本として今も大切にしている。大学図書館には先人からの専門図書や資料が蓄積されており，多くを学び活用できる。

小中高等学校には学校図書館がある。学校図書館法（1953）ですべての学校（小中高等学校，中等教育学校，特別支援学校）に設置される。学校教育に必要な基礎的設備で，その健全な発達を図り，学校教育の充実が目的である。学校図書館の歴史はその定義や範囲などの議論から概観しにくいが，学校内の図書館という実態では，明治前半に学校を設置場所とした公立図書館がある。都市部では独立していくが，町村部では昭和前期まで存在する。明治後半には近代学校教育が展開し，西欧の新しい児童観と教育方法や教師の実践の工夫蓄積などから，校務分掌の図書係や児童文庫の設置もみられ，学校教育に必要な学校図書館の設置に至るが，戦時体制下で様々な影響を受ける。戦後は占領政策，アメリカ教育使節団，国内の新教育構想のなかで，まず戦前の学校の主教材である教科書とともに，有益適切な図書，雑誌，新聞，視聴覚資料などの活用が認められる。そして学校教育法施行規則（1947）で，学校設置に図書館や図書室が必備となる。さらに教師らの実践，学校教育課程や教科書と学校図書館のかかわりの模索の中で，一層の充実をめざす学校図書館法が成立する。その一方で図書館という一設備の単独法制定が他設備や各教科の法整備の必要性につながる懸念も示される。また学習指導要領に学校図書館の活用が記されるが，占領政策転換や新教育批判，公費の資料購入，学校司書や司書教諭の配置など様々な考えの中で，時に廃止や批判の対象となる。しかし，学校図書館は今日まで教師の実践，児童生徒の活動や成長発達に深くかかわり，資料提供や活用奨励などの指導機関，児童生徒の読書・学習・情報センター機能，居場所，教員の指導力向上やサポート機能，家庭・地域の読書活動支援など多様な意義をもつ。現在，学校教育課程の言語活動や探究活動，主体的・対話的で深い学びの実践や協働的学習の場として，豊かな心，確かな学力，生きる力，生涯学習や主権者，防災，国際理解教育などへの活用が期待される。オンライン授業や電子化の中で図書館は常に工夫され，本のない電子図書館や，本にふれる移動図書館も続いている。

▲ マイクロリーダー

図書とともに学校には多くの教科書がある。教科書には様々な工夫がみられる。例えば『世界図絵』（Orbis sensualium pictus.1658）である。著者はモラビア（現チェコ共和国）のコメニウス（Johannes Amos Comenius, 1592-1670）で，教育学者であり教師である。この本は世界最初の子ども向けの絵入りの学習絵本や教科書といわれている。その内容は実物を絵と言語化した音などで表して，言葉と結びつけ，世界と人を結びつけようとしている。構成は植物，動物，自然，宗教，人など150章からなる百科事典のようで，絵や図に番号が付され，対応する番号に名称や説明がある。このわかりやすい表記は，当時は画期的で欧米の学校に諸言語に訳され広まる。形式は同じで内容が異なる異版本も広まる。現在も絵や図から言語，事物と言語の統合，事物認識からの言語教授法，感覚的事物から抽象的概念の理解方法など，その視聴覚的手法や教材の先駆から教育学やメディア研究の対象である。日本でも絵入りの書は遅くとも奈良時代頃から絵巻物，奈良絵本，草双紙，狂歌本，図譜，絵手本など多数あり興味深い。

▲ 世界図絵（Orbis sensualium pictus.1777）

これまで人は様々な記録を創り現在に残してきた。その記録は保存，活用され未来に伝達される必要がある。古文書や公文書などを蓄積する施設に国立公文書館（National Archives of Japan）や専門図書館，博物館があり，そこで歴史の事実がわかる。

図書館や図書にはいろいろあり話は尽きないが，その記録や蓄積から何かがわかる。図書館にアクセスし，本や資料を開き，読み，視聴体験などをすれば，古から現在への歩み，今保存すべきもの，今後の世界がみとおせるかもしれない。自ら学び，自ら考え，未来を創りましょう。

参考文献

塩見昇. 1986.『日本学校図書館史』全国学校図書館協議会.

Comenius, Johann A. 1777. *Orbis sensualium pictus.* 12th ed. Translated by Hoole, Charles. London: S.Leacroft ; reprint, Tokyo: Holp Shuppan, 1983.

▲ 国立公文書館

ESSAY

コロナウイルスと図書館，あるいは「戦争」と「平和」

国際教養学科 准教授　髙塚 浩由樹

2020年3月初め，私はフランスのエクサンプロヴァンス市立メジャーヌ図書館を半年ぶりに訪問した。アルベール・カミュの『手帖』の原稿を精査するためである。科研費のサポートを受けたこの調査は，今年で6年目。そして今回が8回目の訪問になる。

カミュ研究において，『手帖』は第一の情報源とされている。というのも，自動車事故で亡くなった作家が遺した日記兼創作ノートだからである。しかし，生前，カミュは『手帖』のタイプ原稿を秘書に作らせ，そこに修正を加えていた。彼の死後に刊行された『手帖』が修正後のテクストを出版したものであることは，研究者の間でもあまり知られていない。私の研究の目的は，修正前の『手帖』を復元し，その資料的価値を構築しなおすことにある。

カミュが亡くなったのは1960年。今年はちょうど60年目にあたるが，今回の調査は異例のものとなった。図書館の貴重資料室に普段ならたくさんいるはずの閲覧者が，私ひとりきりだったのである。

これには理由があった。1月末までに，メジャーヌ図書館の貴重資料は，同じ市内に新設されたミッシェル・ヴォヴェル図書館にすべて移されていた。だが，カミュの原稿は残った。原稿の権利保有者はカミュの双子の子供であり，原稿の移動にはこのふたりの許可が必要だ。しかし，長女は同意していても，パリで蟄居している長男からの連絡がない。そのせいで，原稿を新図書館に移せないのだ。

引越直後の空き家のようにからっぽな資料室で，約2週間，閲覧者は私ひとりだけ。その私を2名の司書の方が交替でサポートしてくださった。私にとっての至福の2週間。調査は進捗し，司書の方とたくさん話もできた。フランスで急激に拡大していたコロナウイルスの感染も，当然話題になった。

3月13日（金）の夕方，司書の方に感謝の念を伝えて図書館をあとにした。その時点で公に決まっていたのは，感染拡大阻止のため，翌週月曜からフランス全土で学校が閉鎖になることだけで，図書館は通常通りに開く予定だった。だが，16日（火）20時，マクロン大統領はテレビ演説を行い，コロナウイルスとの「戦争」を宣言。わずか16時間後の17日正午からの外出禁止と国境閉鎖を通達した。美術館などと同様に，全国の図書館は，以後2ヵ月の間，閉鎖されることとなった。

3月18日の夜の便で日本に向かう予定だった私は，16日夜の大統領演説のあと，ホテルのフロントで「残っている宿泊客はあなたひとりです」と告げられた。またしてもひとりきり…　結局，帰国便の新たな予約と荷造りで徹夜したあと，国境閉鎖が迫るフランスから17日朝に「脱出」した。帰国後の2週間，私は自主的にホテルに滞在した。その間，感染の可能性に脅えていた私にとって，メジャーヌ図書館で享受した2週間の「平和」は，まるで遠い昔の記憶のようだった。ホテル滞在中，日本でも，ウイルスの感染拡大に比例して，カミュの小説『ペスト』がベストセラーになっていることを知った。Twitterでは，書店の『ペスト』の売場に付けられた，「おひとり様1冊まで」という転売防止を目的とするポップの写真が拡散されていた…

それから4ヶ月が経過した7月下旬，私はコロナウイルスの抗体検査を受けた。陰性だった。感染経験のないことが明らかになった私の心に，まだ「平和」は訪れていない。「戦争」はなお継続中なのである。

ESSAY

図書館の想い出

食物栄養学科 准教授　葛城 裕美

私の図書館の一番古い記憶は，小学生の頃です。両親が週末になると，市立図書館へ妹と一緒に連れて行ってくれたのを覚えています。絵本コーナーの一画は他の場所より一段高くなっており，大きな絨毯が敷いてある居心地の良い場所で，靴を脱いで，寝転がりながら本を読んでいました。小学５年の時，「読書マラソン」という読んだ分だけマスを塗って行くという企画があり，塗るのが楽しみでたくさんの本を読んだのですが，今思い返してみると，残念ながらマスを塗るのが目的になってしまい，あまり本の内容を覚えていないです。中学校では部活に習い事にと忙しく，図書室から足が遠のいてしまいました。高校に入るとすぐに，図書室見学があり，多くの先輩が静寂の中，黙々と勉強している姿は印象的でした。まもなく私も，自然と図書室にいるのが当たり前となり，水泳部の練習が始まる前とシーズンオフでは図書室が居場所になりました。受験勉強では，あちらこちらの図書館を渡り歩きました。地元横浜の区図書館，隣の鎌倉市図書館など，図書館には，それぞれ地域の歴史などのコーナーがあり，勉強の合間に見て回って，面白かったことを覚えています。

本学の食物栄養専攻に入学してからは，栄養士の資格取得のために，空き時間など可能な限り，図書館へ通って書籍を探し，実験・実習レポート作成に励みました。その後，病院栄養士勤務を経て，女子栄養大学へ編入学しました。食・栄養の書籍が多く，読むのが楽しくて，１日の内に何度も通っていました。博士論文作成の時には，国立国会図書館，東京大学図書館へも行きました。両館とも厳粛な空間で，蔵書の多さに圧倒されました。国立国会図書館は，日本国内で出版されたすべての出版物を収集・保存してあり，圧巻でした。

病院で栄養士の勤務をしながらの管理栄養士国家試験，製菓衛生師試験，子育てしながらの保育士試験も，家族の支えのもと，図書館へ通い，国家試験に合格することができました。現在は，図書館員さんがいてくださるおかげで，雑誌，論文等の閲覧や取り寄せを始めとし，膨大なデータの中から検索して頂いたり，電子ジャーナル，相互貸借や文献の複写サービスなども利用させてもらい，教科書や論文の執筆をしています。

出産してからは，本をもっと読みたいという思いが強くなり，子どもと一緒に本を手に取り，読んでいます。就寝前の本の読み聞かせは，日常の忙しさから解放され，すーっと心が癒され，ぐっすり眠ることができます。これからも，ライフステージに合わせて利用できる図書館に感謝しながら，本と共に暮らしていきたいです。

● FACULTY PUBLICATIONS

本学部教員の刊行物紹介

高度情報ネットワーク社会とマーケティング概念の変容

蓼沼 智行 著　［なでしこ出版］

21世紀に入って，マーケティング概念は大きく変化した。情報化社会が到来し，まずコミュニケーションの在り方が大きく変わった。マーケティング活動においてコミュニケーションはそれまでは一方向に進められてきたが，インターネットの普及と情報通信技術の進展によって双方向のコミュニケーションが可能となった。コミュニケーションの変化は，企業・組織のマーケティング戦略の在り方を大きく変え，総じて，マーケティング概念の変容を促している。

本書では，AMA(American Marketing Association) の定義を基にマーケティング概念の変容について概観した上で，各章において，個別企業・組織の動向に着目し，事例研究，アンケートやフィールドワーク調査，各種データ等を用いながら分析，検証している。

今日，マーケティングの対象は営利・非営利を問わず多岐に亘っている。また，マーケティングは経済社会において課題視されている事象を解決する学問として位置づけられている。それ故，企業・組織にとって益々その重要性が増している。そうした対象やマーケティングの適応範囲の拡大がさらに，その変容を促す要因となる。マーケティングは時代の変化に伴い，今後も変容していくものと考えられる。

多文化共生と異文化コミュニケーション

～台湾における東南アジアからの人々との共生

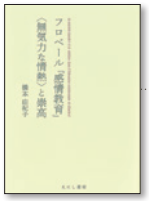
小川 直人 著　［八朔社］

日本では改正出入国管理法の成立により，2019年4月からより多くの海外（主に東南アジア諸国）からの労働者を受け入れ始め，多文化共生がますます必要な時代になりつつある。そこで，同様の状況を日本よりも早く経験してきた台湾における多文化共生に焦点を当て，筆者の過去20年ほどに渡る台湾（主に台北）訪問の際の経験と，2018年の3月末から1年間，台湾大学(國立臺灣大學人文社會科學發展中心)に訪問学者として滞在した際に行った，離島を除いた台湾全土に及ぶフィールドワークに基づきこの本を書いたが，その際読み手にわかりやすく示すために多くの写真を掲載した。

本書の内容は，台湾での東南アジアからの人々との共生の実態から多文化共生と異文化コミュニケーション研究について考察したものであるが，台湾で起きていることは決して対岸の火事ではなく，筆者の住む沼津においても，ベトナム人やインドネシア人，スリランカ人など，他のアジアの地域から来た若者たちを街中や駅前で目にする機会が増えている。日本政府の方針により今後，海外から日本に働きに来る若者たちが日本各地で増えていく中，本書が彼（女）らとの共生をより良いものへとする一助となれば幸いである。

● 本学部教員の共著等紹介

書名（出版年月）	著者名等	出版社
世界は啄木短歌をどう受容したか（2019 年 10 月）	池田 功 編 **安元 隆子** 分担執筆	桜出版
歴史としての日教組　上巻（2020 年 2 月）	広田 照幸 編 **冨士原 雅弘** 分担執筆	名古屋大学出版会



フロベール『感情教育』〈無気力な情熱〉と崇高

橋本 由紀子 著　［えにし書房］

ギュスターヴ・フロベール（1821-1880）の『感情教育』（1869）には，1848年の二月革命を中心とした激動の時代を背景に，一人の気弱なブルジョワ青年フレデリックやその友人たちの夢想と幻滅が漂っている。フロベールはこの長編小説で，「自分の世代の人々の感情史」を描き出すことをめざしていた。

本書では，情熱に聖性を見出すロマン主義の世代に属する青年の「無気力（inactif, 非行動的）」な情熱と，「崇高」の関係を問う。フロベールは決してキリスト教作家ではないが，神性を求める人間に興味を示し続けた宗教的な作家といえる。その作品は常に，宗教と愛というテーマや，自らの芸術に求められるべき崇高という問題に直結していた。

『感情教育』において，フレデリックの情熱と畏敬の念は，セーヌ川を渡る船上で出会った人妻アルヌー夫人に集中する。しかしこの女性へのまなざしの中に満たされる「崇高」は，皮肉の記号として描かれる。フロベールは青年のロマン主義的な「聖性」を追求し，その卑俗性を露にし，しかしそこに潜む宗教性をあぶり出す。この物語には無気力な愚かさが満ちているが，それは様々な感情に翻弄される人間における，崇高の在処を示唆するものでもあった。

Western Images of Kakemono in Modern Times

濱屋 雅軌 著　［V2 Solution Inc.］

本書は，近代西洋人の掛物に関するイメージを明らかにしている。日本の掛物は西洋人によって選好，収集，愛好され，掛物に関するイメージが形成されていった。オークションが掛物ブームで重要な役割を果たし，カタログが作成された。それらの掛物の要素は，フィクションとノンフィクション，過去と現在，主観と客観，神と人と悪魔，動物と植物である。これらの要素は，近代西洋人の掛物に関するイメージ形成の在り様を示している。

近代西洋人の掛物に関するイメージは，多様，広範囲であり，掛物自体に関してばかりでなく，掛物に類するつづれ織りや刺繍に関してのイメージもある。それらのイメージは，具体的かつ抽象的であり，西洋的近代化と日本の伝統を包含する近代日本の社会文化と結び付くものであった。また，西洋思想を基礎に，西洋と日本の文化的要素が結び付くものでもあった。それらの文化的要素は，西行・ダンテ・シェイクスピア・新約聖書に関する古典的知識に基づく思想を含むものであった。

こうして始まったＴＰＰ交渉

石田 勝之 著　［中央公論事業出版］

2011年11月，日本が「TPP交渉参加へ向けた関係国との協議表明」以来，内閣のTPP幹事会議長として初めて関係各国との交渉に当ったのが筆者である。本書は，安全保障を背景にしたアメリカの狡猾なやり方，各国それぞれの思惑，国内の賛成・反対，国会内での駆け引き等，内閣府副大臣の苦闘の事実を基に記したものである。

2017年1月，TPPをリードしてきたアメリカがトランプ政権になり突然「アメリカファースト」を訴え離脱。世界に激震が走ったが，結局，紆余曲折を経て，アメリカ抜きでスタートした。「TPP11」である。アメリカも今年11月に大統領が交代すれば，再び交渉に加わる可能性がある。

現在，米中貿易戦争と新型コロナウイルス感染拡大により，大幅なマイナス成長が予想される。加えて日本は少子高齢化，人口減，資源のない国である。成長力著しい地域から国益を得なければならない。日本の技術力と外交力を駆使しながら，TPPは貿易と投資の一層の自由化に向けた頼みの綱となる。

TPP交渉のスタート時に，こんなやり取りがあったのだと後世の人々の参考になればと綴った一冊である。

所蔵資料紹介

Jude the Obscure（日陰者ジュード）

Thomas Hardy 著

国際総合政策学科　准教授　杉本 宏昭

この本とその著者トマス・ハーディ（Thomas Hardy 1840-1928）は，英文学科の学生に必須な科目である「英文学史」において必ず取り上げられる。しかし英文学科の学生でも，授業で課題でも出されない限り進んでこの本を手に取り読もうとしない。なぜなら内容が暗くて辛いから。ハーディ円熟期の作品であり，この作品を最後に，ハーディは長編小説を書くのをやめた。

ハーディは1871年に第1作目の長編小説を出版，そして1895年の*Jude*出版まで14の長編小説を世に出した。その他に短編小説集，エッセイ多数，そして詩を生涯にわたり発表し続けた。英文学史に名前が載るハーディである。素朴な疑問だがなぜ名前が載るのだろうか？当たり前の答えかもしれないが，英文学史の中で外せないからである。ではなぜ外せないのか？その理由は，文学という芸術を通して何か世の中に一石を投じたからである。さらに円熟期のまた最後の長編小説となれば，投じた石はそれ相応に大きなものであり，実際，波紋も大きかった。

本を読むとき，読者は主人公の人生経験を追っていく。つまり我々は主人公の経験を多かれ少なかれ疑似体験しているのだ。本気の文学は，話の筋を追って楽しめない。なぜなら主人公の人生経験は，例えていうなら，「しょっぱい」ものだから。もし今のあなたがそのしょっぱさを受け入れられないと感じたならば，その本を辛いと思い読むのをやめてしまうのではなく，「なぜ受け入れられないのか」と自分に問うべきだ。考え続けそして最終的に何が残る？あなたは，自分が他人の痛みを想像できる心があると発見するだろう。またはもしかしたら，しょっぱくない人生を希求する心を発見するかもしれない。それは別な言葉では希望かもしれないし，自分にとって都合の良い何かを人生にもとめる心かもしれない。ハーディはそれをロマンティシズムと呼んだ。ハーディはロマンティシズムを否定しているのではない。ロマンティシズムとは常に持ち続けるものであると自身も認めている。ハーディが言いたいことはロマンティシズムと現実との乖離である。求め続けるがしかし叶わないそれでも歩む生である。

*Jude the Obscure*は暗く辛い話である。孤児のジュード（主人公）は，祖母の家で育つ。殺伐とした風景と環境の中，辛い少年時代を過ごす。何の慰めもなかった。生きてゆくため石工となり，将来いずれの日にか聖職者・学者になる夢を持つ。「夢をかなえるため，今の辛い状況を抜け出すため，寸暇を惜しみ猛勉強の末に学者となった。めでたし。めでたし。」と言いたいのだが，実際ジュードは階級という見えない壁に阻まれ，夢をかなえることができない。やがて石工の仕事もできなくなり，パンを売りその日をしのいでゆく生活を送る。希望が破れ安定収入もなく，失意と貧困のどん底である。

ジュードには子供がいた。長男のあだ名は“Father Time”，そして彼に続く幼い弟妹たち。ある日ショッキングな事件が起こる。Father Timeは弟妹たちを道連れに自殺。彼が残したメモは「多すぎる」だった。つまりこのような貧困の中，この人数では生き延びて行けないというメッセージが込められている。

この小説の他の内容も多分に世間を騒がす内容，またこの事件を書いた故に，ハーディは多くの人たちから批判される。文学界の仲間からも。しかしハーディはこれをユーモアの一種と言う。ユーモアと言っても楽しい笑いのユーモアの意味ではない。そもそもこんなことを書くこと自体，最終的に責められることを予想していたはず。しかしハーディは書いた。どうして？それは読者が考えること。本気の文学は答えを与えてくれない。だから一生，何度も，その答えを考え続けられる。なぜなら本気の文学は人生を描いているから。

教員による推薦図書紹介 ●RECOMMENDED BOOKS

プロフェッショナルの条件

P.Fドラッカー 著／上田 惇生 編 訳　　［ダイヤモンド社］

国際総合政策学科 教授　建宮 努

コロナウィルスによってビジネス環境は一変し，AIやロボットの本格的なビジネス投入も加わって，企業はこれまで経験したことがないような大きな振れ幅で，新しい日常を生きる社会を相手にしたビジネスへの組み替えを迫られている。同時にそこで働く個人も，テレワーク化を前提とした，成果主義前提のジョブ型雇用への移行，AIやロボットではできない仕事への移動と，これまでにない大きな振れ幅で働き方を変える必要に迫られている。

このような大きな環境変化の中では，何が大事で何が大事でないかを考える指針となるものが必要となるが，本書はその指針を示す一冊としてお勧めできるものである。

本書は2000年に日本で編集翻訳出版され，個人のプロフェッショナリズムとキャリアとの関係を明らかにする良書である。出版後20年が経過した今でも，本書の前提となっている労働集約的な社会から，知的生産性の高い働き方への社会的な変化は，まるで現在の変化を目の前で見るように今の時代に適合しており，大いに参考になるはずである。

本書の最大の特徴は，最も重要な軸を，誰もが平等に持っている「時間」においている点である。同じ時間に対して，より高い成果を生み出す専門性の高さによって，知的労働者は評価されると定義し，最も重要な仕事に時間を集中投下するには「やってもやらなくても成果と関係のない仕事を，いかにしてやめるかの判断が重要」というはっきりした処方箋が明示されていて明快である。

個人が組織的に成功すること，つまりキャリアを向上させるという面でも，「優れたコミュニケーションとは何か?」，「リーダーシップとは何か?」，「イノベーションとは何か?」という問いに対して明確な答えが用意されており，総合的に「人生をマネジメントするとはどういうことか?」という方向性も示唆している。今の時代を生きる皆さんのひとつの指針として，ぜひ一読をお勧めしたい。

ど田舎うまれ、ポケモンGOをつくる

野村 達雄 著　　［小学館集英社プロダクション］

国際総合政策学科 助教　本間 祥子

世界的に大ヒットしたゲームアプリ『ポケモンGO』の開発を率いたのは，日本人の若者であることを知っているだろうか。本書は，ゲームディレクターとして『ポケモンGO』の開発を指揮した，野村達雄氏の自伝である。注目すべきは，本書が単なるサクセス・ストーリーではなく，困難を抱えるなかでも，野村氏がどのように人生を切り開いてきたのかという点である。

第二次世界大戦後，中国に取り残された日本人女性たちを「中国残留婦人」と呼ぶ。その多くは中国人と結婚（再婚）し中国で暮らしていたが，1972年の日中国交正常化を機に，日本へ帰国することができるようになった。野村氏の祖母は，この中国残留婦人の一人である。野村氏はこのような家庭環境のもと中国・黒龍江省で生まれ，その後，小学生の時に日本で暮らすことになった。日本語がほとんど分からないまま小学校に通い，少しずつ日本語を覚えた。ゲームやプログラミングに強い関心のあった野村氏は，小学6年生から新聞配達をして，中学生の時に初めて自分でコンピュータを購入したそうだ。

また，本書の中で，野村氏は現在の大学生たちへメッセージを送っている。大学1年生の頃，アルバイトに明け暮れていた野村氏は，「大切な自分の時間をたった1200円で切り売りして，もし社会人になってから，20歳のときの貴重な時間を1時間1200円で買い戻そうとしてもできない」ということに気がつき，アルバイトを辞めることにした。そして，未来の自分に20歳の自分の時間を買ってもらうつもりで奨学金を借り，勉強やプログラミングなど，自分の好きなことに時間を使うようになった。野村氏は，同じような大学生にも，アルバイトに費やす時間を他のどんなことでもいいので，自分の好きなことや情熱を持っていることに使うようおすすめすると述べている。

『ポケモンGO』の背景には，「外に出て歩き，世界を探求し，人とつながる」というビジョンがある。皆さんもぜひ，自分の足で世界を歩いて人とつながり，どのようにキャリアを構築していくのかを探ってほしい。

動物裁判　西欧中世・正義のコスモス

池上 俊一 著　　［講談社 講談社現代新書］

国際教養学科 助教　安酸 香織

現代人は，本書のタイトルより，動物保護の裁判を思い浮かべるかもしれない。しかし著者の池上氏が扱うのは，法廷に立つブタ，退去命令を下されたネズミなど，まさに動物に対する裁判である。しかもこの裁判はフィクションではなく，13〜18世紀ヨーロッパにおいて残された数々の記録をもとに，歴史学研究により明らかにされた実際の裁判事例である。

本書の魅力は，「時空を越えた異文化交流」という歴史学の醍醐味を存分に味わえるところにある。人間の子供を食べた家畜が，逮捕され，投獄され，人間と同じ裁判にかけられて処刑される。大量発生した害虫や害獣が，出頭を求められ，弁護士を付けられ，罪の悔い改めと退去を命じられ，最終的には破門に処せられる。現代人には何とも受け入れがたい事例をいくつも紹介されるうちに，嘲笑の念や物珍しさを次第に忘れ，この不可解な慣習が中近世ヨーロッパで生じた理由を探し求めるようになる。こうして読者は，自己とは異なる他者を理解しようと努め，自らの常識を見つめ直す「歴史思考の旅」に誘われるのである。

さらに本書は，中近世の動物裁判が，現代社会とも密接な関係にあることを教えてくれる。この慣習は，12・13世紀ヨーロッパにおける自然と人間との関係の逆転，いわば人間中心主義の表れなのである。それ以前の人間は，神々の支配する自然の秩序を維持するために，人間や代りの動物を犠牲として捧げてきた。しかし動物裁判の時代には，「神聖な」人間の秩序を破った自然界の住人を，人間の法に則って処罰した。たしかに動物裁判は，啓蒙思想や科学的合理主義による批判の中で18世紀に消滅していった。しかし，その後も保たれた人間中心主義的な自然とのかかわり方は，現代にどのような結果をもたらしているだろうか。本書は，現代社会が抱える問題を考えるうえでも，重要な示唆を与えてくれるのである。

歴史学に馴染みのない学生にも，ぜひ本書を通して，時空を越えた異文化交流と歴史のつながりを体感してもらいたい。

永遠平和のために

カント 著／宇都宮 芳明 訳　　［岩波書店 岩波文庫］

国際教養学科 助教　**藁科 智恵**

「『永遠平和』とは単なる空想である」と現実主義を標榜する者は言うかもしれない。それは今の時代においても，ドイツの哲学者イマヌエル・カント（1724-1804）の時代においても全く変わらない。カントは，『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』の「三批判書」を発表し，近代哲学の祖とされる人物である。彼が71歳の時に著したのが，『永遠平和のために』（1795年，増補版1796年）である。この著作では，題名からもわかるように「永遠平和」の実現のための構想が記されている。しかしここでカントは単に自らの理想を論じているのではない。カントは「三批判書」の一つ，『実践理性批判』において，自己以外のものから強制される道徳ではなく，あらゆる倫理的行為の原理となる定式を提示している。「あなたの意志の格律が常に同時に普遍的な立法の原理として妥当しうるように行為せよ。」これがカントの定言命法である。カントは，『永遠平和のために』において，この定言命法を諸国家間の関係に応用しているのである。

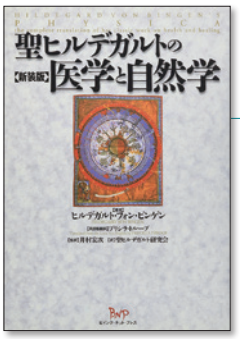
カントはこの著作の中で「永遠平和」を単なる理想で現実的には意味を持たないとする主張の論拠の誤りを指摘し，「永遠平和」の実現可能性とその根拠を論じる。その中で「永遠平和」を実現しうる体制として，諸国家の連合について述べる。この連合が目指すのは「なんらかの国家権力を手に入れることではなくて，もっぱらある国家そのもののための自由と，それと連合したほかの諸国家の自由とを維持し，保障することであって，しかも諸国家はそれだからといって，公法や公法の下での強制に服従する必要はない（45頁）」ものとされる。これはまさに後に生まれることとなる国際連合のあり方と合致している。この著作は，哲学者カントが道徳と政治をどのように捉えていたかを伝えると同時に，国際連合のプレゼンスが低下しつつある現代において，国際連合の理念についてもう一度深く考える機会を我々に与えてくれる。

帳簿の世界史

ジェイコブ・ソール 著／村井 章子 訳　　［文藝春秋］

ビジネス教養学科 准教授　**川戸 秀昭**

フィレンツェで生活をしているとメディチ家を意識せずに過ごすことはできない。この街はメディチ家抜きには語ることができないからである。芸術の黄金期を迎えたフィレンツェに君臨したロレンツォ・デ・メディチの肖像画はボッティチェリ，ブロンズィーノ，ヴェロッキオ，ヴァザーリらによって多く描かれた。それらと折に触れて出会うだけでなく，ボッティチェリやフィリッポリッピの絵画を目にすればロレンツォの特徴的な表情が脳裏に浮かんでくるのである。フィレンツェのルネッサンス芸術が今もなおこの地で人々を魅了し続けているのもメディチ家なしでは考えられない。本書ではそうしたメディチ家の栄華を帳簿の面から記している。また，利益と損失の明確な把握につながる革命的な第一歩となる複式簿記が中世のイタリア商人により発明された理由についても興味深い記述がなされている。当時のイタリアではアラビア数字が使われており，貿易の発展により共同出資方式が採用されたことにより，出資者への利益配分を計算する記録が重要になっていった。そのため会計は，収入と支出を集計するだけでなく，投資家に還元すべき利益剰余金の累計を計算するために活用されたとのことである。複式簿記なら，投資家の取り分を長期にわたって分割して払い出す場合にも，正確に計算することができる。世界史とあるように，イタリアだけでなく会計という共通テーマでフランス革命やウェッジウッドの原価計算術，ベンジャミン・フランクリンの会計術，さらにはリーマンショックと大恐慌はなぜ防げなかったのかについての分析にも感心させられた。歴史の流れは権力と富（金）の移り変わりでもあるが，ここでは金の面から歴史を分析しているという点で興味深く新鮮な印象を受けた。終章に「会計が文化の中に組み込まれていた社会は繁栄する」との一文があったが，フィレンツェを見ていると合点がいく。はたして現代の日本はどうであろうか。



聖ヒルデガルトの医学と自然学

ヒルデガルト・フォン・ビンゲン 著／プリシラ・トループ 英訳／井村 宏次 監訳　　［ビイング・ネット・プレス］

食物栄養学科 助教　**安西 なつめ**

12世紀のベネディクト会系女子修道院の院長ヒルデガルト（Hildegard von Bingen，1098-1179）は，神秘家，預言者，作曲家として知られている。彼女は自身の幻視体験に基づく宗教的著作のほかに，『病因と治療』，『自然学』（ともに1151-1158年頃）などを著した。これらは今日，中世修道医学の集大成と言われている。

ヒルデガルトの『自然学』（邦題『聖ヒルデガルトの医学と自然学』）は，原典のラテン語から英訳を経て，井村宏次氏によって日本語訳された。同書の解説にある通り，『自然学』には植物，元素，樹木，石，魚，鳥，動物，爬虫類，金属に分類された512の素材が登場し，それらの薬効，使用量，用法が病気の原因や症状に合わせて述べられていく。たとえばわたしたちもよく知る食材「パセリ」の項には，「体内に石があって痛む人は，パセリに三分の一量のユキノシタを加えワインで煮て布で濾し，サウナ風呂の中で飲む」とある。また動物の章に，「ラクダ」や「モグラ」と並び，「ユニコーン」が登場する点はいかにも中世らしく，挿絵のない絵本や百科事典を眺めるような楽しみがある。

中世の医学では，体から出される血液や尿などの状態を頼りに病気を判断し，治療にあたっては，体に取り入れられる清浄な空気や水，とりわけ食事が重視された。ヒルデガルトは食事のとり方について多くの記述を残しており，特にハーブ（薬草，香草）の利用は広範で，収穫の方法にも詳しい指定がある。治療あるいは養生ともいえる彼女の処方の一部はヨーロッパを中心に受け継がれ，今日でも利用されている。ヒルデガルトのレシピによるハーブティを飲みながら『聖ヒルデガルトの医学と自然学』を読み，中世医学の一端をのぞいてみるのも面白いかもしれない。

図書館事務課から ● LIBRARY OFFICE

電子書籍・電子ジャーナルを活用しよう！

大学に足を運ばなくても図書館の本や資料を利用する方法があります。その一つが，電子書籍と電子ジャーナルの利用。自宅にネット環境があれば，電子書籍や電子ジャーナル・データベースを利用して，課題やレポートに関する内容を調べることができます。その利用についてご案内します。

❶ 電子書籍 (eBook)

本学部では，紀伊國屋書店「KinoDen」（キノデン）と丸善雄松堂「Maruzen eBook Library」を中心に，和書の電子書籍を利用できます。学術書のほか，各種語学，海外旅行ガイド，就活関連，岩波書店「現代人の教養」100冊などを揃えています。また，「ProQuest eBook Central」では洋書の電子書籍を取り扱っています。

まずは，国際関係学部の図書館ホームページ（https://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/）にアクセスし，中ほどの「電子書籍 eBook」ボタンをクリックして電子書籍のページに進みましょう。さらに，それぞれの電子書籍サイトに入り，キーワード入力することで蔵書を検索できます。

学外から電子書籍を利用する際は，学術認証フェデレーション（学認）へのアクセスが必要となります（「利用する」ボタンの横にGakuNinと表記）。学認の操作方法は，電子書籍のサイト内にある利用マニュアルを参照してください。

利用上の注意

① アクセスが重なった場合は，時間をおいてからでないと利用できません。
② 推奨ブラウザでないと表示に不具合が生じる場合があります。

さらに，図書館の蔵書をオンラインで検索できる「OPAC」の詳細検索機能を使って，電子書籍の蔵書を調べることもできます。キーワードを入力し資料区分の電子ブックにチェックを入れることで，閲覧可能な電子書籍を調べることもできるので，試してみてください。

❷ 電子ジャーナル・データベース (e-journals / Database)

前述の図書館ホームページから「電子ジャーナル・データベース」のボタンをクリックしページに入ることで，電子ジャーナル・電子データベースが利用できます。「事典・辞典・図書」，「新聞系データベース」，「統合検索」，「分野別検索」に分類されているので，利用内容に合わせてサイト内を進んでみましょう。

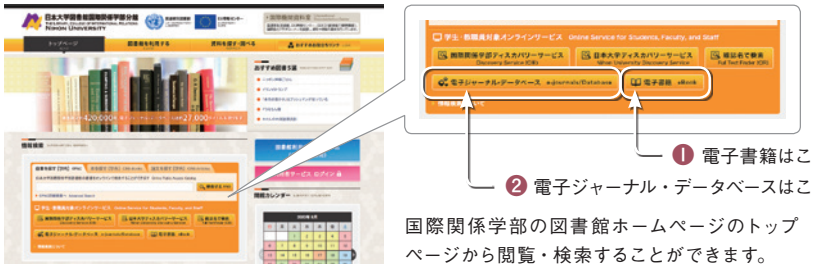
「新聞系データベース」などは，図書館及び学内ネットワークに接続されたパソコンからのみ利用が可能です（GakuNin表記がない場合，外部からは利用できません）。また，パソコンやタブレット端末を教務課に事前登録することで，学内の無線LANに接続し利用することもできます。

GakuNin表記された電子資料については，本学の学生及び教職員であれば，自宅などからNU-AppsGのID・パスワードでアクセスすることができます。ただし，全文提供先が学認に対応していない場合（契約により学内ネットワークからのアクセスのみ認めている場合）は，全文を表示させることができません。

利用上の注意

① 一部の電子資料では，利用後にログアウトが必要です。
ログアウトしないと次に利用したい人がアクセスできなくなります。
② ダウンロード支援ソフト等のプログラムを使用し，一括で大量にダウンロードすることは禁止されています。

現在，一部のジャーナル・データベースでは，学内での利用が困難な状況に鑑み，緊急措置として，学内限定の電子資料を学外からでも利用することができます。詳しくは，myOPACからID・パスワードを入力し確認してください。



国際関係学部の図書館ホームページのトップページから閲覧・検索することができます。

図書館では主に紙媒体の書籍・雑誌を揃えてきましたが，今回の感染症への対応として，電子書籍の蔵書を増やしています。読んでみたい電子書籍がありましたら，図書館事務課までお申し出ください。

図書館ニュース
BIBLIOTHECA
第16号
通巻第161号
発　行　日／2020年11月1日
編集・発行／日本大学国際関係学部
図書委員会
https://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/